博士論文要旨

論文題目　郭嵩燾の西洋認識と儒教的思惟様式――「理勢」論の近代中国における展開
氏　　名　苗　婧

博士論文は近代中国の最初の外交官である郭嵩燾（1818－1891）の西洋認識を考察するものである。本論文は郭嵩燾が同時代の儒教知識人と異次元の西洋認識と文明観を形成したことに注目し、彼の開かれた西洋認識と文明観を根本的に支えたのは、「西洋の衝撃」という外部要素、同時代の儒教知識人たちが得難かった直接な西洋体験よりも、儒教内部から生み出された思惟様式、つまり明末清初の儒者の王夫之にも共通する「理勢」の論理だということを明らかにし、そして、「理勢」という儒教的思惟様式の近代における新たな展開とその意義について考察したものである。

郭嵩燾は何よりも中国の初代外国駐在公使として知られている。郭は 1875 年に、イギリスの領事館員マーガリーが中国雲南省とビルマとの国境付近で殺害された事件（マーガリー事件）で謝罪するために、駐英公使（出使英国欽差大臣）に起用され、また 1878 年には駐仏公使（出使法国欽差大臣）にも任命され、1877－1879 年の約二年の間、西洋に駐在していた。

中国文明以外に文明があることを認められない清末中国の儒教知識人たちと比べて、郭嵩燾の西洋認識の画期性は、西洋を「有本有末」の文明として捉え、それを高く評価したという点にあった。同時代の儒教知識人たちは中国の絶対的な文明的優越性という立場から、弱体化した清末中国を立て直すために西洋の近代的な文物を導入する際に、「中体西用」論や「附会」論を用いて自己正当化しなければならなかった。それに対して、郭嵩燾は西洋社会を実体験する前にすでに西洋を「政教が修明であり、本末を兼ね備えている（政教修明、具有本末）」文明的な存在と認識していた。そして、駐外公使として西洋社会を実際に観察した経験から、彼はさらに西洋の政治を儒教伝統における理想的な「三代」聖人による政治にも匹敵するものと賞賛するに至った。

しかも、重要なのは、郭嵩燾の開かれた西洋認識と画期的な文明観は何よりも彼の儒教的な「理勢」的思惟様式によって導き出されたものだということである。その論理的構造は王夫之を代表とする儒教的「理勢」論に通底したものである。郭嵩燾の中における開かれた「理勢」的思惟様式は、彼が西洋を認識する際の障碍ではなく、むしろ逆に、彼の開かれた西洋認識と新しい文明観を形成させる重要な思想的資源であった。

王夫之と郭嵩燾とは「理勢」的思惟様式を共有したが、明末清初の王夫之の「理勢」論は「中華」という安定した閉鎖的な文化空間のなかで、その開放的な性格を十分に発揮することができなかった。それに対して、清末の郭嵩燾は「西洋の衝撃」によって開放させられた文化空間の中で、「理勢」的思惟様式の開放性を存分に発揮させ、伝統的文明観の閉鎖性を

打破し、より開放的な文明観を確立することができた。

清末中国の儒教知識人は「真なるもの」＝「自己のもの」を前提にしたため、彼らの閉鎖性は異文化接触の経験の欠如にもたらされたものというよりも、伝統的文明観に規定された思惟様式の閉鎖性によるものであった。それに対して、郭嵩燾は「理勢」的思惟様式に依拠し、「真なるもの」＝古今東西に共通する普遍的なものという見方を確立し、文明を時代的・地域的な隔たり、異なる文化の間の相違性を超えた普遍的なものとして捉えた。

本論文は大きく三つの部分に構成されている。第一部分では、儒教思想伝統の中で王夫之の「理勢」論を捉え、その特徴を明らかにしたとともに、それがいかに王夫之の歴史論の中で応用されていたのかについて考察した（第一、二章）。第二部分では、郭嵩燾の外交論と外交実践にあらわれる「理勢」的思惟様式を考察し、王夫之との異同を比較した（第三、四章）。第三部分では、郭嵩燾の「公論」を含めた「政教風俗」論と文明論を中心に、郭の画期的な文明観を支えていた「理勢」的思惟様式を明らかにし、王夫之との異同を比較した（第五～七章）。

第一章では、王夫之の「理勢」論とその特徴を考察した。王夫之は張横渠の「気」の哲学と朱子の「理」学を批判的に継承した上で、独自の「理気」論を構築し、またそれに基づいて「理勢」論を導き出した。本章では、王夫之の「理勢」合一論の特徴とその意義、そして、歴史的な「勢」に対する彼の捉え方を明らかにした。

第二章では、具体的な事例に対する検討を通して、王夫之がいかに「理勢」論をその歴史認識に応用したのかを考察した。本章の議論を通して、王夫之の歴史論から二つの次元の「理勢」を観察できる。一つは「勢」の絶えざる変化に伴って「理」も変化するということであり、今一つは時空間に貫く全体的な「勢」には不変で、普遍的な「理」が潜んでいるということである。そして、王夫之の開かれた「理勢」論と彼が生きていた明末清初という閉鎖的な文化空間との関係についても本章で検討した。

王夫之の中の二つの次元の「理勢」は郭嵩燾の西洋認識の中でも観察される。郭嵩燾は「理勢」的思惟様式によって、政治外交や文明に関する議論を展開し、それを自ら実践した。

第三章では、郭嵩燾が「攘夷」論を批判する際に用いた「理勢」の論理、及びその「理勢」の論理と彼の歴史考察との関係を中心に考察した。この場合、郭は国の安危得失を顧みずにひたすら「攘夷」を唱える「虚」論を批判して、国の自立を保つことを根本に据え、時の「勢」を測りながら、「理」に準拠して対外策を講じていくことの重要性を力説した。

第四章では、郭嵩燾の外交に関する議論と実践を三つの時期に分けて検討し、それらの中から観察される「理勢」的思惟様式を明らかにした。郭は一貫して「理勢」的思惟様式によって外交論を展開し、さらに、西洋に対する認識が深まるにつれ、彼の外交論も絶えず深化した。郭の中にはやはり二つの次元の「理勢」を観察することができる。一つは、郭は清国と西洋諸国との間の「勢」をはかり、自己保存を維持するための合理的な判断という「事理」を明らかにすることの重要性を強調したことである。もう一つは、郭は「勢」の如何にかかわらず、常に「理」を守らなければならないと主張したことである。この場合の「理」は「信・

義・誠」であり、やがてさらに「平」へと深化した。郭にとって、「信・義・誠」と「平」はともに「大公」を体現するものにほかならなかった。さらに、第三、四章の議論を踏まえて、外交面における王夫之と郭嵩燾の「理勢」をめぐる展開の異同と、郭嵩燾が「理勢」をどのように新しく発展させたのかについて検討した。

第五章では、「公論」を中心に郭嵩燾の政治論を考察した。具体的に言えば、清末中国、歴史上の南宋・漢、そして西洋という三者の「公論」に対する郭の評価を中心に、「公論」に対する彼の思考の深化過程を検討した。郭は清末中国における「虚」と「私」の主戦論を南宋の「攘夷」的な「公論」の延長線上にあったものと位置付けて批判し、一方、漢の「実」と「公」の「公論」を評価した。この場合、一君徳治の「公」という儒教的政治体制の中で、中国の群臣による「公論」は大きな限界性を持っている。しかし、儒教文脈の中で解決できない群臣による「公論」の問題について、郭は西洋で政党・議会・新聞という新しい在り方の「公論」を発見し、それを大きく称賛するに至った。本章の「公論」に対する議論は第六章の「公」政治に対する議論とつながっている。

第六章では、郭嵩燾の「政教風俗」論を核心とする文明論について考察し、同時代の儒教知識人と異次元の郭の文明観を支える思想的な原動力は「理勢」的思惟様式だということについて検討した。郭の「政教風俗」論を二つの次元の「理勢」を通して見れば、まず、「勢」の変化に伴って「理」も変化するという「理勢」において、郭は三代・秦漢以降（漢・南宋）・清末中国・西洋という異なる時代・地域における「勢」を考察し、それぞれの「勢」における異なる「政教風俗」という意味の「理」を認識した。一方、時空間に貫く全体的な「勢」には不変で普遍的な「理」が潜んでいるという「理勢」において、郭は時代的・地域的な違いを超えて「勢」を全体的に捉え、異なる「政教風俗」に共通する普遍的な「理」を考察した。この普遍的な「理」の実現は、「公」の政治の達成にほかならなかった。郭にとって、この場合の「理」はもはや儒教における理想的な「三代」を基準にしたもの、中華世界という閉鎖的な文化空間に閉じ込められたものに止まらず、西洋文明をも含む古今東西に共通するより普遍的なものであった。

第七章では、文明観における王夫之と郭嵩燾の「理勢」をめぐる展開の異同を比較しつつ、近代の郭嵩燾が「理勢」論をどのように新しく発展させたのかについて確認した。王夫之の「理勢」論は開かれた論理であるが、「中華」という安定した閉鎖的な文化空間のなかでその開放的な性格を十分に示すことができなかった。しかし、「理勢」的思惟様式を共有した郭嵩燾は、西洋との出会いを契機に、自らの思考と実践を通して、「理勢」的思惟様式の開放性を存分に発揮することができた。郭嵩燾の開かれた西洋認識と文明観はその表れであり、その開放性は同時に儒教的思惟様式が近代に持つ可能性を示すものでもある。

最後に、終章において、本論文の総括をした。